

『ポーランド児童救済事業の記録』

『波蘭児童関係日誌』1920～1922年 宇都榮子ほか(編/著) 彩流社 2021.12



本書は1920～22年の日本赤十字社による「シベリア孤児救済事業」100周年にふさわしい、画期的な待望の書である。

【本書刊行の意図とその構成】日赤の救済事業について(優れた先行研究の蓄積はあるが)その二大史料『波蘭(ポーランド)児童関係日誌』(東京『日誌』)と『大阪日誌』の全容はこれまで明らかにされていない。未来の子供達の安定確保の方策を考察するためにも、両『日誌』および関係新聞雑誌記事の翻刻紹介には大きな意義がある(15～20頁)。

【本文編】[第1章]ポーランド国児童救済事業開始までの経緯[第2章]同救済事業(総計765人のポーランド児童が母国に帰還)[第3章]貞明皇后からの下賜、各団体による慰問、日本国民の同情[第4章]『日誌』から読み解くポーランド児童日本滞在中の暮らし、についてまとめてある。

【史料編】1.両『日誌』 2.日赤、福田会の機関誌『博愛』『フクデン』 3.～5.新聞・雑誌掲載のポーランド児童関係記事の翻刻(183～738頁)。

『日誌』以外のポーランド児童関係史料は関東大震災(1923)のため消失した。本書では日誌の内容の補完のため史料2～5を所収し、それらを精密に接合して救済事業の全容を立体的に再構築している(61, 139～140頁)。

100年前の世界は第一次世界大戦(1914～18)直後、「国際連盟」出発のとき、日本では「大正デモクラシー」「社会連帯責任」の思想の普及などを背景に「社会事業成立」のときだった(22～24頁)。

【要点】①東京の生活施設は「福田会」(仏教系の孤児養育施設)で、隣接する日本赤十字病院=「医療の最先端の病院」により献身的な医療活動が進められた。腸チフス集団感染のときには、終始早期発見・早期治療、日常生活の衛生面・病気の予防

にも深く真心こもった注意とケアが実施され、日本滞在中に児童の死亡者はいなかった(81～83頁)。

②日波双方の児童たちは短期間に相互の言葉を解するようになり、第1日目から仲良く活発に遊び、慰安会などで「二つの国歌」を共に歌って友愛を深めた(565～572, 722頁)。長い実績をもつ「福田会」が救済事業の教育・福祉面で果たした役割は、日赤の医療活動と並んで非常に大きい。

③多数の日本国民がポーランド児童を戦乱の犠牲者として同情し、有形無形の支援を提供し救済事業を底辺から支えた。児童を励ますため各種慰安会や遠足が日赤と関係団体の相談と調整の上で整然と実施され、児童たちに大きな喜びと生涯忘れ得ぬ思い出を残した。

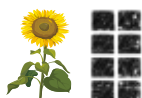
④救済事業を行なう側(日赤本部、各地方支部)と受ける側(波蘭児童救済会)がお互いを尊重理解し事業を展開した(38頁)。ポーランド児童は同国の付添人の指導監督の下、10人単位で自炊・洗濯などを行い、1日の生活リズムは規則正しく、朝夕の祈祷・日曜教会出席(公教青年会の支援)は必ず行い、祖国の宗教・家族との絆を毎日心に刻んだ。

【結語】帰国した児童たちは固い絆を保ち1929年以降「極東青年会」を運営、第二次大戦下にはレジスタンス組織の中核「イエジキ部隊」を結成、ワルシャワ蜂起では多大な犠牲者を出した。

100年前のこの救済事業は「普遍的な人道支援」として「未来の両国の関係史」に重大な意義をもつ。今後の両国の研究・対話の発展に期待したい。本書はその歴史的な出発点になるであろう。

(石田レイ子、新潟虹の会代表)

避難する
ウクライナの人々
とともに



ウクライナから避難した人々を迎えて

寺田 頼子

3月6日(日)朝9時前にドアをノックする音が聞こえ、夫のピョートルがドアを開けると、隣人のバーシャから「昨夜ワルシャワ西駅でウクライナから避難した人々を助けるボランティアをしていたところ、行き先がなく途方に暮れているウクライナ人親子に出会ったのだけど、滞在できる部屋はありませんか?」と相談がありました。



2月24日に戦争が始まってから、避難民を自宅で受け入れるポーランド人の姿をニュース等でたくさん見てきました。隣国ウクライナで起きている恐ろしいことを想像すると、ポーランドに住む者として助けることは当たり前のように感じ、キーウから避難してきたお母さんオラ、息子さんたち(17歳のアルテムと3歳のプラトン)を隣人と共にサポートすることになりました。

ワルシャワで

それからは、戦争が長引くことを踏まえ、できるだけ早くワルシャワで生活基盤を整えることを考え始めました。元々ポーランドの大学への進学を希望していたアルテムはポーランド語を勉強していたので、近所の高校にもすぐに受け入れてもらえ、プラトンの保育園もすぐに見つかり、給食代も無料にしてもらえました。周りの知り合いもすぐに服や食料を支援してくれたり、ウクライナ人への各種割引やサポート体制も整備され、ポーランド社会の寛容さと優しさに触れる日々です。

人口の15%以上もの避難民を受け入れているワルシャワの街を歩くとウクライナの国旗であふれ、通りでは当たり前のようにウクライナ語やロシア語が聞こえます。避難生活の長期化とともに、住居や仕事の問題も大きくなりそうです。我が家に滞在中のオラはポーランド語を習い始め、仕事も見つかり、アルテムもポーランドの大学に進むことを決め、ポーランドへの移住に向けて歩み始めています。

ポズナンで

3月末からは、学生時代を過ごしたポズナンでウクライナ人親子2組をサポートすることになり、時々週末にポズナンに出向き、住環境の整備、買い出しや通訳などお手伝いをしています。スウェーデンに住む妹の友人の友人の親戚というご縁です。

スウェーデンやドイツ、さらに西側に避難しているウクライナの人たちもたくさんいるのですが、やはり地理的にも文化的にも近いポーランドに残りたい人が圧倒的に多い状況です。

ザポリージャから避難してきたお母さん2人と子供3人で、お母さんたちは学校の先生の仕事をオンラインで続けています。ウクライナに残してきた家族、ペット、自宅のことが心配で早く帰りたい気持ちをこらえながら、地下のシェルターで怯えて過ごした不安な日々を子供たちに二度と体験させたくないと感じ、希望を捨てずに過ごしています。

ポズナンの親子は普段はロシア語を話し、私とは英語でのコミュニケーションとなります。そのため、日本人である私がウクライナ人とポーランド人の店員の間に入り、英語からポーランド語に通訳をするというなんとも奇妙な光景になったりもします。

今回、日本の友人からもたくさんの応援メッセージやサポートをいただき、心強く感じています。少しでも早く平和が戻ることを願って、微力ながらも支援を続けていきたいと思っています。

(てらだ・よりこ、ワルシャワ市在住、伊達市出身)

どこで暮らしてもいいけど、我が家がいちばん Wszędzie dobrze, ale w domu najlepiej

ミハウ・マズル

1939年に第二次世界大戦が勃発したとき、イギリスやフランスとの同盟関係があったものの、私たちポーランド人は、事実上ドイツと単独で交戦しなければなりません。もちろん外からの支援がなかったので、我が国は善戦したものの敗北してしまい、その結果、ワルシャワなどポーランドの重要な国土の大部分がドイツに占領され、500万人以上の人々の命が失われ、貴重な文化財や歴史的建造物が破壊されました。この時とりわけ、多くの若者、知識人が虐殺されたため、ポーランドは失われたものを取り戻すために多くの歳月が必要でした。

ウクライナの人々を支援するポーランド人

それゆえ今回のウクライナとロシアの戦争は、ポーランドの人々の戦争の国民的記憶を激しく揺動かしたのです。今年の4月に行われたある社会調査によれば、約77%のポーランド人が、ウクライナ人難民を支援したいとの結果が出ています。外国では、ポーランド人は互いにあまり協力的でない

との悪い評判がありましたが、今回の戦争はポーランド人の心を一つにまとめる役割を果たしました。国が本当に危機に直面した時には、ポーランド人はそれまでの対立を忘れて、その危機への対処のために団結することができるのです。

2022年5月初旬現在、ポーランドには300万人を超えるウクライナ市民が避難してきましたが、これほど多くの難民のためのポーランド人からの支援

は衰えることなく、ますます力強く行われ続けています。この難民の数はポーランドの人口の約8%にも至っており、多くの日本人は、その数字に驚いているようです。さらにポーランド人がウクライナ人から大変な迷惑を受けているのでは、とすら尋ねられることもあります。

しかし私たちの視点からすれば、このようなウクライナ人への大規模な支援活動は、迷惑などでは全くなく、むしろ当然なことなのです。かつて第二次大戦が勃発した当初、確かにポーランドは同盟国からの支援が得られず、それは深刻な戦禍をもたらしました。しかしポーランド人は逆に、その歴史的経験から、国際的な連帯と支援の重要性を強く認識したのです。

とりわけウクライナの兵士たちが、自分の子ども、

妻、そして老人たちがポーランドで暖かく守られており、とくに子どもたちがウクライナの未来のための教育をポーランドで続けているがゆえに、命懸けで祖国を守るために戦えるのだと、私たちポーランド人は確信しています。

ポーランドには「Wszędzie dobrze, ale w domu najlepiej」ということわざがあります。日本語では「どこで暮らしてもいいけど、我が家がいちばん」という意味です。私たちはウクライナの人々が我が国で快適に暮らしていけるように努力していますが、ウクライナの人々にとっても、我が家が一番だと思います。戦争が一刻も早く終結し、平和な暮らしがウクライナに戻り、彼らが我が家で安心して暮らせる日々が再び訪れることを私は心から願っています。

(Michał Mazur 北大大学院教育推進機構 特任助教)

ご寄付 (2022.12~) 感謝申し上げます

(1口千円、敬称略)(7)霜田英麿(2)川染雅嗣、高橋健一郎

今年度 (2021.9~2022.8) 会費納入のお願い

年会費(一般 3,000 円、学生 1,500 円)また、維持会費としてご寄付(1口千円)も承ります。

【ゆうちょ銀行振替口座】記号02740 5 番号19735 【加入者名】北海道ポーランド文化協会 (または)

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座][店番号]028[口座番号]0605084

[加入者名]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ(北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚)

※ご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください。

※遠方の方はご寄付 年千円で会誌 POLE の定期読者になっていただくこともできます。事務局にお問合せください。

POLE106 目次

《第100回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞&交流会『赤い闇～スターリンの冷たい大地で』(氏間多伊子)・・・ 1

《緊急座談会》『ピアノ～ウクライナの尊厳を守る闘い』を観て(池田光良・氏間多伊子・小笠原正明・川染雅嗣・徳田貴子)..... 2

《アマレヤとともに》アマレヤ劇団の方々と一緒に対雁を訪れて(檜木貴美子、新井藤子)／アイヌ女性とアマレヤ劇団の5年間の繋がり(多原良子)／アイヌとカムイのためのレクイエム(丸山博)..... 5

ブロニスワフ・ピウスツキに関する新刊書の出版記念会(ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ)..... 8

《第101回例会》第11回朗読会「午後のポエジア」(予告)..... 9

ブロニスワフ・ピウスツキと紙芝居～朗読者の対談から／ご挨拶(新井藤子、R・ジエプカ、K・ノヴァク)..... 10

《ポーランドだより》13 第3回「HAIKU 日本の詩形」コンクール(2022年)入賞句(津田晃岐)..... 11

《新刊紹介》『ミコワイ・レイ氏の鏡と動物園』(栗原成郎)／『ヤマシュ・コルチャックの教育実践』(塚本智宏)..... 12

《ポーランド&ニッポン歳時記》38(津田モニカ、ピョトル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)..... 13

《新刊紹介》『ポーランド児童救済事業の記録』(石田レイ子)..... 14

《避難するウクライナの人々とともに》ウクライナから避難した人々を迎えて(寺田頼子)／どこで暮らしてもいいけど、我が家がいちばん(ミハウ・マズル)..... 14

	発行 北海道ポーランド文化協会		ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北 18 条西 15 丁目 3-19 安藤方 TEL・FAX 011-556-8834、hokkaidopolandca@gmail.com		安藤厚／新井藤子 氏間多伊子／熊谷敬子 塚本智宏／松山敏
東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付 TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058			